艦隊これくしょん　～絶望の海に盾は舞う～

主（ぬし）

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

１９４２年　１１月１５日　午前１時２０分。ソロモン諸島沖。その日、戦艦霧島は深海棲艦の猛攻に敗れ、沈む運命だった。結末を受け入れて膝をついた霧島の前に、その『謎の艦娘』は颯爽と立ちはだかった。奇妙な艤装を纏う少女が、奇妙な台詞を高らかに謳う。

「イージスシステム、起動」。

目次

決戦！鉄底海峡を抜けて！ ―― 1
ＡＬ作戦／ＭＩ作戦 ―― 12
紅茶と珈琲 ―― 18

決戦！鉄底海峡を抜けて！

１９４２年１１月１５日　午前１時２０分
南太平洋　ソロモン諸島　ガダルカナル島沖
通称　『鉄底海峡（アイアン・ボトム・サウンド）』

どす黒い曇天の下。ブゥウン、と蝿群の羽音のような耳障りなそれが響き渡った瞬間、満身創痍の艦娘たちの顔が蒼白に染まった。一斉にして音の方向を見上げれば、墨汁の飛沫を散らしたような無数の黒い染みが曇天にまだら模様を描いている。幾塊もの暗雲を成して迫り来るそれらは、深海棲艦の放った艦上爆撃機（Dive Bomber）の密集編隊だった。その数およそ４０機以上。邪悪な憎悪を隠さない敵艦爆の大編隊が、制空権を奪われて無防備を晒す艦娘たちに狙いを定めていた。

「霧島、逃げてぇッ！」

後方を振り返った榛名の悲鳴は爆音によって無情に掻き消された。格好の獲物を見つけた敵艦爆が、損傷のために一人艦隊から遅れていた霧島にとどめを刺さんと雪崩を打って急降下を始めたのだ。ギクリと反射的に首を振り仰いだ霧島の直上、艦爆胴体底

部の爆弾投下扉（シャッター）が顎（あぎと）を開き、有効搭載量限界（ペイロードオーバー）まで詰め込まれていた対艦用５００ポンド徹甲爆弾が姿を現す。触発信管を内蔵し、弾殻を特殊甲鈑で被覆された爆弾は、対空機銃弾を悉く跳ね返して確実に戦艦の装甲を抉る。そして、元より大破寸前の霧島はそれらに対する術を持たない。急降下によって倍加される重力が最大に達した刹那、艦爆が次々と爆弾を投下（ドロップ）する。回避する隙間を一切与えない、容赦の無い高密度絨毯爆撃の雨。そう、まるで豪雨だ。黒い雲から降り注ぐ黒い雨。私は雨に打たれて倒れるのか。避けられない己の終焉を受け入れ、弛緩した腕がだらりと下がる。己の失態に大切な姉妹が巻き込まれなかったことだけがせめてもの救いだった。ふっと口端を歪めた霧島を目にして、榛名は妹の絶望と諦観を悟った。

「霧島ぁッ!!」

妹の元に駆けつけんと踏み出すが、その動きに先んじた金剛が両腕を広げて立ち塞がった。思わず殺気立って睨んだ榛名に、金剛もまた強い眼差しのみを押し返して諭す。間に合わない、と。流血に濁る金剛の瞳は、これ以上の犠牲を看過できない責任と妹を見殺しにする呵責で今にも張り裂けそうで、榛名は己の未熟と無力に総身を戦慄かせた。

ヒュウゥ。炸薬を満載した鉄塊の風切り音が姉妹の胸を悲痛に切り裂く。霧島の白い衣に爆雷の影が暗く落ちる。もはや間に合わない。間に合ったとしても、圧倒的な物

量の前には自慢の主砲も高角砲も意味を成さない。この状況を覆して霧島を助け出す奇跡など、どう手繰り寄せようとも得られない。

否、これは最初から決まっていた結末だ。誰もが目を背けてきた現実が突き付けられたのだ。

しょせん艦娘（わたしたち）は、かつての史実のレールを走る過去の異物に過ぎない。レールの先には何もない。どんなに死力を尽くしても、どんなに奇跡を願っても、私たちでは運命（れきし）には抗えない――――。

――――しかし、未来で生まれた彼女になら、出来る。

霧が立ち籠めたのは、まさにその時だった。

巨人が半身をもたげるように突如足元から湧き上がってきた膨大な濃霧は、周辺一帯を瞬く間に白く満たした。渦を巻く霧は触れれば掴めそうなほどに濃ゆく、自分の鼻先

すらボヤけるほどだ。立ち尽くす霧島の影が、見る見るうちにせり上がる靄の壁に隠される。艦娘たちが装備する貧弱な電探では電波を屈折させる重厚な霧を見透せない。霧島を見失った榛名が噛みあわせた奥歯を強く軋ませる。

最期すら見せないつもりか。私の、ただ一人の妹の死に様を。冷酷な運命を呪う榛名の耳に、聞こえるはずのない囁きが届く。

『さようなら、姉さんたち。お先に逝きます』

ハッと霧の向こうに霧島の寂しげな横顔を幻視して、胸が切なさに締め付けられる。見開いた瞳に涙が浮かび、昔日の姉妹の思い出が脳裏を風のように冷たく駆け抜けていく。楽しかったあの日々が、もう二度と還らぬものになろうとしている。戦うために艦娘になった。後悔はしていないし、いつか訪れる結末のことも理解していた。それでも、心が抗わずにはいられなかった。

爆雷の飛来音が雷鳴のように鳴り響く。５００ポンド爆弾の衝撃波は並大抵のものではない。巻き込まれまいと必死の形相の金剛が榛名を力づくに引き離しにかかる。直撃が近い。惜別が、近い。

せめて散り際だけでも看取らねばと榛名は金剛の手を無理やりに振りほどいて身を乗り出し、

次の瞬間、視界の隅を銀色の影が走り抜けるのを見た。

それは艦娘のようだった。痩せた身体に角張った艤装を纏った黒髪の少女だ。腕に携えた砲塔はか細く、僅かに一本のみ。背負う艤装は少女の体躯には不釣り合いな大きな〝箱〟。戦艦の威容には遠く及ばぬ、薄鈍色の奇妙な駆逐艦だ。

だが、その速力は恐ろしく速い。榛名たちの横合いをすり抜けて驀進する駆逐艦は、聞いたこともない機関の唸りを上げ、二人の耳朶を真横から劈いた。煙突からの排煙が見えない。蒸気タービンエンジンではない。艦娘とも深海棲艦とも明らかに異なる桁違いの高出力と加速力は、まるでジェット機のそれを連想させる。

「とまれ！　どこの所属――――」

気付いた金剛が見覚えのない駆逐艦に向けて鋭く制止するも、その背中は瞬く間に立ち籠める霞の内に猪突して姿を消した。まるで霧の向こうを完全に見通せているような迷いのなさだった。無色の排煙は微かも視認できず、海波と機関音すら遠ざかればもはや現実だったのかすら怪しい。あれは世界が垣間見せた何かの前兆なのか、はたまた飽和した思考から染み出した幻想か。榛名と金剛はただただ忘我して未知の駆逐艦の姿を霧の中に追うしかなかった。数秒足らずの交錯と激しい波飛沫の中、榛名が僅かに視認できたのは、駆逐艦の艦首装甲に刻まれた『１７４』という謎の数字のみだった。

霧の中、影法師のごとく立ち尽くしていた霧島がガクリと膝を折る。焼け落ちた艤装には昔日の勇壮な面影は微塵もない。姉たちには毅然とした最期を見せていたかったが、もう立っていることすら限界だった。気を抜けば今にもバッタリと仰臥してしまうだろう。醜態を隠してくれるこの霧には感謝している。

「霧島、霧の中に沈む……なんて、神秘的で気に効いた演出。何より、四肢が散り散りに吹き飛ぶ醜い様を姉さまたちに見られずに済むことが一番素敵ね」

そう、冷笑気味に独り言ちた霧島の耳に、ヒュウウと死神の声が忍び寄る。途端、腹をくくったはずの覚悟があっさりと叩き折られた。恐怖で息がくっと詰まり、唇がザラザラに乾き、糸をきつく張ったような耳鳴りに思考が寸断される。ああ、情けない。艦隊の頭脳を自称しているのなら、名高い金剛姉妹の末席に連なる自覚があるのなら、最期まで誇り高く振る舞えないでどうする。

絶叫しそうになる己を叱咤し、震える指先を拳の中に握り締め、グッと顎を引いて来たる死神を待ち構える。

「さようなら、姉さんたち。お先に逝きます」

せめて最後まで目を背けることはしまいと瞼に矜持の力を込めて歯を食い縛る。白い霧の障子に昏い輪郭がじわりと浮かぶ。もう一度、今度は強く覚悟を決めてカッと見

開いた目の前で、無数の鉄槌の切っ先が靄の膜を突き破った。鉄塊から直接削り出したような鋭い弾頭が目と鼻の先まで高速で迫る。今からこれに貫かれるのか。きっと痛いだろうな。堪え切れなかった雫が一粒、頬を伝って海面に波紋を打つ。漆黒の死がついに霧島に届く、その刹那。

銀色の背中が、両者の間に敢然と躍り出た。

「位相配列レーダー（SPY-1）始動、イージスシステムデータリンク完了、目標指示装置（TDS）脅威評価策定（ターゲットロック）完了、目標識別番号（トラックナンバー）1から90までセット、艦対空ミサイル（シースパロー）発射準備良し、Mk41ミサイル垂直発射装（VLS）90セル全門開放」

流れるような台詞に弾かれ、少女の艤装が内奥から火を噴いた。側面の発射炎退避路（アップテイクハッチ）から噴出した余剰熱波が海面を赤銅色に染め上げる。艤装表面、碁盤の目のような発射口が同時に勢い良く開き、目も眩むような閃光を輝かせた。運命に『否』を突きつける希望の力。絶望を阻む勇気の光。爆炎（ブラスト）の翼を背に纏い、銀の艦娘が力強く謳う。

「全弾発射（オール・サルボー）」

瞬間。轟音と衝撃波を置き去りに、９０本の炎の剣が天高く屹立した。屹立する剣の束は、遥か彼方から見れば天に突き立つ巨大な剣山の如く見えたに違いない。灼熱する刃の先端に細長い飛翔体が覗き見えたのは一瞬で、それらはあっという間に音速を突破して視界から飛び去った。弾頭先端部に内蔵された自発式電波誘導装置が迷うこと無く己を爆弾と敵艦爆に体当たりさせる。９０基全て、狙いを外すことはなかった。

次いで霧島に降り注ぐ、激しい光、音、風圧。間近に太陽が出現したのではと疑うほどの強烈な閃光と熱波に思わず手で視界を覆う。

だが、それだけだった。空気の塊以上の衝撃が霧島に届くことはなかった。火球が急激に収縮する。爆光が少しずつ光度を落とす。奇妙な静けさが雪のようにゆっくりと降り積もっていく。爆弾の落下音も敵機の飛来音も聞こえない。

「――――お母さん」

不意に、幼子のような声がした。親愛の情を隠さない甘えるような声は、なぜだか霧島に似ているような気がした。聞き覚えのないはずなのに、誰よりも近しい血の繋がりを感じさせる。情愛、感動、悔恨、悲哀。膨大な感情を内包した声が、嬉しそうに、悲しそうに、震える喉からぽつぽつと絞り出される。

「助けに来たよ。本当は会えないはずだけど、奇跡が起きたの。クルーのみんなが力を貸してくれたの。貴女を護れてよかった。建造されてよかった。この力を手に入れら

れてよかった。……どうか、元気でいてね、私のお母さん」

「貴女は、一体――」

視界の明滅が回復する。目の前を覆っていた手を翻し、霧島は少女に問う。

しかし、そこにはすでに何者の影もなかった。いつの間に夜が明けていたのだろう。目に映る光景いっぱいに、世界を縁取るような地平線が青々と輝いている。爆風は濃霧どころか遥か上空の曇天すら吹き飛ばして、眩い青空と暖かな朝日の陽光が霧島を労るように降り注いでいた。空を埋め尽くすほどだった爆弾や敵艦載機の機影など、存在すらしなかったかのように跡形もなくなっていた。

「霧島っ!!」

夢から醒めたような面持ちで呆然とする霧島の横腹に、突然ドスンと強い衝撃が走った。

「……痛いですよ、榛名姉さん」

海面に押し倒された格好のまま、霧島は自身の胸に顔を埋めて離れようとしない榛名(あね)の震える背中にそっと手を置いた。頭を傾ければ、金剛を先頭にして他の仲間も目に涙を浮かべて駆けつけてくる。ここに来て、霧島はようやく自分が生き残ったことを――

――名も知らぬ、けれども誰よりも絆の深い何者かに護られたことを実感したのだった。

戦艦霧島は、その後深海棲艦との戦争を四姉妹と共に最後まで生き抜き、戦後は後人

の育成と組織の安定に立派に務めたという。
謎の艦娘の正体は、結局謎のままであった。

２０１５年１１月１５日。
海上自衛隊史上、前代未聞の事件が起きた。英国訪問を終えてソロモン諸島沖を航行していたイージス護衛艦『きりしま』のミサイル格納庫（サイロ）から９０基ものスタンダード艦対空ミサイル（SAM）が突如消失したというのだ。盗難された形跡もなく、乗員による手違いも、ましてや謀反の可能性もなかった。警務隊及び情報保全隊による秘密裏の捜査が進むにつれて、その日の午前１時２０分、乗員全員が一時的な記憶喪失に陥っていたことが判明した。それはちょうど、海底に眠る旧海軍の戦艦『霧島』を追悼する館内放送が流れた時刻でもあった。取り調べを受けた乗員は皆一様に「霧島を助けたいと思っただけ」という曖昧な証言を繰り返すだけだった。そのあまりの突飛さ故にこの不祥事は厳重に秘されることとなり、非常時用にダミー会社を通じてプールされていた機密防衛費をゴッソリと消費して、事態は有耶無耶とされた。消失の原因は今なお不明のままである。

護衛艦『きりしま』。

２１世紀の日本国海上自衛隊が保有する、高性能防空システムを備えたこんごう級ミサイル搭載護衛艦弐番艦である。旧石川島播磨重工業製ＣＯＧＡＧ方式ガスタービンエンジンを４基搭載し、前後両甲板に合わせて９０門ものミサイル垂直発射装置セルを持つ重武装の本艦は、最大５００ｋｍという驚異的な索敵範囲を誇り、その半径内に存在する２００以上の目標の同時探知・追撃を可能とし、２０以上の目標を同時に迎撃する能力を保有する、洋上対空防衛に特化した最新鋭護衛艦である。

なお、艦番号は１７４が当てられている。

ＡＬ作戦／ＭＩ作戦

１９４２年６月５日
北太平洋　ハワイ諸島北西　ミッドウェー諸島沖　北約１００キロ

「いったい、誰が――――」

その日沈むはずだった艦娘、蒼龍は呆然と水平線を見つめていた。彼方では、敵空母ヲ級２隻が今まさに轟沈せんと身体中から鮮血の如き火柱を噴き上げながら海中に没しようとしていた。突然帰るべき場所を奪われた敵機の群れは平静を失い、その隙を突いた蒼龍の艦載機によって瞬く間に海の藻屑と消えた。

敵の撃破。だが蒼龍に勝利の喜びは無い。彼女の戦果ではないからだ。自慢の九九式艦上爆撃機は敵の迎撃機に全て破壊され、蒼龍には敵空母を沈められるだけの戦力は残っていなかった。それどころか、敵の新型航空機の猛烈な攻撃に為すすべなく晒され続け、艦載機も次々に撃ち減らされ、まさに絶体絶命に陥っていたところだった。空母の数においても、艦載機の数や性能においても、圧倒的に敵が優っていた。絶望の戦い

を強いられ、勝てる道理は微塵もなかったはずだった。

ドオン、と腹を震わせる爆音が海面に巨大な波紋を立てる。立て続けに2つ、激しい爆炎が海上に屹立した。測ったように同じタイミングで、敵空母の燃料と弾薬が誘爆し、轟沈したのだ。いや、実際に測ったのだろう。時間と標的を狙いすまし、正確無比な攻撃を2隻の機関部と弾薬庫にそれぞれ同時に命中させたに違いない。その攻撃はどこから放たれたのか。今この瞬間も敵の猛攻の前に苦戦しているであろう赤城も加賀も飛龍も、こちらに援護の艦載機を飛ばす余裕はないはずだ。

では、誰が敵を倒したのか……？

「――――油断しちゃ、ダメだよ」

果たして、いつの間に近づかれたのか。背後からそっと囁かれたその声に、蒼龍は肩を跳ね上がらせて身体を反転させた。振り返ったと同時にギリと弓を構える。しかし、声の主の姿は見えない。素早く視線を左右に走らせ、やがて〝灯台下暗し〟という昔ながらの諺を思い出して、ゆっくりと視線を足元に落とした。

「……貴女が、助けてくれたの？」

すぐ足元、海面からちょこんと頭だけ出した潜水艦が、じっと蒼龍を見上げていた。

問われた潜水艦は、短いツインテールを揺らしてこくんと小さく頷く。エックス字を象る大きな髪留めが印象的な少女だった。潜水艦による雷撃なら、同時に2隻の空母を狙い撃つことも可能だろう。それには高性能な潜水艦と長射程の魚雷が必要とされるが、蒼龍の運が良かったのか、この艦娘は両者を完璧に備えていたようだ。

でも、こんな娘、見たこと無いわ。

深海棲艦でないのは確かだが、まったく見覚えのない艦娘だった。だというのに、なぜか他人という気がしない。青みがかった黒髪と精悍な容貌は、どこか鏡で見る蒼龍に似ている気がした。まっすぐにこちらを見つめる双眸は深い深い親愛と哀愁をいっぱいに湛えているようで、溢れる感情に濡れた瞳に蒼龍は少しだけたじろぐ。感謝を伝えようと口を開きかけ、潜水艦の震える声がそれに先んじる。

「本当はね、会えないはずだったの。助けられないはずだったの。でも、奇跡が起きた。だから私は助けに来れた。私はいつでも一緒にいるよ。広くて静かな水底から、お母さんのことを見守ってるよ」

「えっ、ちょ、ちょっと待って――――」

不可解な台詞を言うだけ言って、その潜水艦はすうっと海中に姿を没した。慌てて視線で追いかけるものの、漆黒の輪郭は絵の具を水に溶かすようにあっという間に海中に溶けていく。驚くべき潜行速度に蒼龍はギョッとして手を伸ばすが、すでに届く距離で

はなかった。せめて潜行音を捉えようと耳を澄ますが、機関の駆動音どころかタンクへの吸水音すら聞こえなかった。なんという静粛性、なんという運動性。その驚異的な性能とそれを実現した未知の建造技術に考えを至らせ、蒼龍はゴクリと生唾を飲み下した。なぜ気が付かなかったのだろう。そもそもにして、蒼龍のすぐ背後にいたはずの潜水艦が、蒼龍にすら気づかれないまま、どうやって遥か遠く水平線上に浮かぶ2隻の空母の機関部と弾薬庫を正確に狙い撃てたのか。既存の潜水艦など話にならない。現在、開発が進められている最新鋭の伊二百一型潜水艦でも足元にも及ぶまい。

一体何者だったのか。それに、〝お母さん〟とはどういう意味なのか。だいたい、私はまだ結婚どころか経験だって――――。

「って、こんなことしてる場合じゃない！　飛龍たちを助けに行かないと!!」

数秒の混乱を乗り越え、蒼龍は頭を振って思考を切り替えると仲間の救援へと駆け出した。物思いに耽るのは生き残った者にだけ許される権利だ。

その後、救援に駆けつけた蒼龍の必死の反撃によって、被害甚大だった赤城と加賀は辛くも窮地を脱することが出来た。それとは逆に、貴重な戦力である空母2隻と大量の艦載機――――しかも新型ばかり――――を喪失したことで深海棲艦側は勢いを失い、戦力の再編成に大いに手間取ることとなった。その虚を、戦力を維持した飛龍と蒼龍の空母

部隊、そして後方から進軍してきた大和、武蔵、長門の戦艦部隊は見逃さなかった。空母の消失によって満足に制空権を確保できなくなった深海棲艦にとって、最強の大型戦艦３隻による殴り込みはまさに悪夢だったろう。さらに後方からは修理と補給を終えた瑞鶴と翔鶴が榛名と霧島を伴って参戦し、戦況は一変。艦娘たちによる第二次攻撃は成功し、深海棲艦を見事撃破することに成功した。ＭＩ作戦は誰も欠けることなく勝利に終わり、それからの戦いの行く末を運命づける上で大きな転換点となった。

蒼龍は終戦まで飛龍とともに第一線で活躍し、戦後は後輩の指導と家庭の平和の維持に貢献した。

平成２７年６月５日

ハワイ米軍基地パール・ハーバーへの寄港を終え、日本への帰還の途についていたそうりゅう型潜水艦壱番艦『そうりゅう』から、突如６本の８９式長魚雷が消失するという事件が起きた。厳格に管理されていた搭載兵器の原因不明の消失に、海上自衛隊上層部は騒然となった。しかし、消失したと思われる時間帯が、ちょうど旧海軍の空母『蒼龍』の眠る海域に差し掛かった時であったことを知ると、彼らは経験から何かを悟った

ように、事態の舵を沈静化の方向に向けた。これには、当時のクルーたちが一様に語った「助けなければと思った」という不可思議な証言も何らかの影響を与えたとみられるが、定かではない。

潜水艦『そうりゅう』

日本国海上自衛隊が所有する、非大気依存（AIP）通常動力型潜水艦そうりゅう型の壱番艦である。原子力を用いない通常動力型としては世界最大の艦体を有する本艦の最大の特徴は、先進技術を用いた世界最高レベルの静粛性と、通常動力型としては世界随一の長時間潜行能力である。ディーゼルエンジンと合わせて本艦に採用された『スターリングエンジン』は通常の内燃型機関のように内部で爆発が生じることがない外燃型機関であり、エネルギー効率も非常に優れている。そのため、潜水艦の弱点とも言える機関部の騒音が抑えられ、かつ長時間の潜水行動が可能となっている。また、漆黒の艦体表面を隙間なく覆う吸音ゴムタイルは音波やレーダー波を吸収し、相手からの発見を困難とする。

なお、本艦の外見的な特徴として、船尾に備え付けられた舵の形状がある。音波の反射を少なくし、機動力を向上させるため、本艦の舵はエックス字の形状となっている。

紅茶と珈琲

満身創痍の金剛が、四方八方から接近する6発の魚雷を眺めながらポツリと呟く。

「最期に、美味な紅茶が飲みたかったネ……」

紅茶を半分ほど注がれたお気に入りのカップとソーサーが、無性に懐かしかった。

時は１９４４年１１月２１日午前3時６分。それは華々しい航跡を刻んできた彼女が辿り着いた、まさに終焉の時刻だった。金剛はそっと目を瞑り、全力で駆け抜けてきたこれまでの人生を振り返る。後悔はない、なんて口が裂けても言えない。この海域には傷ついた駆逐艦が何人もいる。雪風、浜風、磯風、浦風。軽巡洋艦の矢矧も頑張って先導してくれていたが、受けたダメージによってその速度は蟻が這うほどに遅くなり、もはやその姿は水平線に辛うじてしがみついているほどに遠い。駆逐艦の少女たちは、金剛という大先輩の存在を心の支えにして頑張っていた。だが、突然闇夜をついて現れた敵の潜水ヨ級に対して有効な対抗手段を打てずに右往左往している。浦風は特に酷く、意識のない彼女を背におぶって逃げ惑う磯風の眦には絶望の涙が光っている。無防備同然の彼女たちを残して沈むのは、誇りある戦艦として無責任極まる。だが、踏ん張ろうにも両足に力は入らず、艦体は徐々に左舷側に傾いでいく。射撃指揮装置は大破、

魚雷発射管も副砲も機銃も、まともに動かない。いくら機関(たましい)を燃やしても、足首まで浸る冷たい海水にわずかばかりの闘志すら吸い込まれていく。無力と化した金剛は、まるで肉体が空間の一点に固定されたかのようにその場を動けず、迫る魚雷を間抜けな顔を浮かべてじっと待っている。運命に追いつかれた、という奇妙な得心に金剛はふっと諦観の息を吐いた。きっとここが、艦娘としての自分に割り当てられた役どころの最後の見せ場なのだ。それにしては、なんと情けない散りざまなのか。磯風の助けを求める視線を金剛は直視出来なかった。末路が決定した金剛など眼中になくなった潜水ヨ級はさらに数を増し、雪風と浜風も散り散りに追い立てられて闇夜に溶け込んでいく。この場に残されたのは、金剛と魚雷だけとなった。こんな醜態が自分の最後の姿としてあの人に報告されるかと思うと、情けなさに身も心も引き裂かれそうだった。

(相済(フォーギブ)みません、提督(テートク)。ずっとお側にいるという約束、守れなかったヨ)

左手の薬指に視線を落とす。一瞬だけ雲間から覗いた月光が、シンプルだが美しい金の指輪を儚げに煌めかせる。

そして、さらにその下、真下の海面下すれすれを突進する迎撃魚雷をもギラリと輝かせた。

「ホワット!?」

背後から正面へ、足のすぐ下を見たこともないほどに高速の魚雷が次々と通り過ぎ

る。接近する魚雷と同じ数の魚雷がまるで糸で操られているかのように一点で三々五々別れたかと思うと、それぞれが意志でも持っているかのように各自の目標を見定め、そして真正面からぶち当たった。ドドドドドドーン。巨大な水飛沫の柱が6つ、大神殿の柱のように海上に突き立った。

　不意に、発生した霧で視界が遮られた金剛の鼻孔に、潮味とはまったく異なる、こんなところに絶対にあるはずのない焦げ臭い香りが感じられた。

「……珈琲（カフィ）？」

「イッエ～ス！」

　紅茶派の金剛が毛嫌いする、泥水めいた黒豆のとぎ汁。眉を顰めて訝しる金剛の背に素っ頓狂な女の声が投げかけられる。甲高い声質は金剛にかなり似ているが、英語発音の訛りは英国式（ブリティッシュ）というより米国式（アメリカン）だ。胡乱げに振り返れば、ベールのような霧の向こう側に、やはり背格好も容姿も金剛によく似た少女がいた。金剛型戦艦特有の『金剛装束』と呼ばれる巫女のような服がよく似合っているが、振り袖は灰色で、茶色のスカートは膝下まで伸びており、金剛たちよりも硬派な印象を意識している。だが、似ているのはそこまで。艶のない銀色の艤装はどれもこれも角ばっていて、砲塔はわずかに1基のみ。口径は金剛の副砲よりずっと劣る。見るからに頼りない武装の少女は、だというのにこれっぽっちも怖じる様子もなく堂々と仁王立ちをしている。先ほどの魚雷はおそ

らくこの謎の艦娘によるものだろう。あれほど正確無比な魚雷迎撃が出来る艦娘の情報など、金剛は見たことも聞いたこともなかった。警戒心を剥き出しにして訝しる金剛に、珈琲の香り漂うマグカップを携えた奇妙な艦娘はむしろ喜びを覚えてニンマリと笑み崩す。

「もう歳なんだカラ、無理しちゃノーよ、お母さん（マイマム）」

「ま、マム!?」

艦齢は確かに長門より上だが、母と呼ばれるほどではない。当然の抗議をすべく口を開きかけた金剛の視界を再び霧が覆い隠し、一瞬の間を開けて潮風に吹き散らされる。

気づけば、銀の艦娘の姿も一緒に消えていた。

１１月２１日。その日を金剛は生き延びた。名も知らぬ、自身を母と呼んだ艦娘に助けられて。その後、金剛は戦いを生き抜き、姉妹と共に幸せに暮らした。助けられなかった駆逐艦たちのことを死ぬまで悔やみながら。

７０年後の同日、イージス艦『こんごう』から6発の０７式垂直発射魚雷投射ロケット（フィッシュ）が消失したが、公にされることはなかった。救済の物語は、これで終幕――――。

「ンな訳無いでしょ!!!」

安直な未来をばっさりと拒絶し、大破寸前の金剛が裂帛の気合いで前進を開始する。向かうは、逃げ惑う駆逐艦たちがいる海域だ。仲間を見捨てて己だけ生き残るなど、誇り高き戦艦の矜持が許さない。そして、その強靭な意志は彼女にも当然のように受け継がれている。

金剛のすぐ後方、ゼネラルエレクトリック製ガスタービンエンジンの咆哮をあげて銀の艦娘が追随する。

「ヘイ、マム！射撃指揮は私がするネ！マムが射(う)って！」

その申し出に金剛は逡巡する。しかし、自身の射撃指揮装置は電探ごと大破しており、兵装は主砲３５．６サンチ連装砲が一門残るのみ。深夜においては目を塞がれているも同然だ。選択肢は無い。

「――ＯＫ。けど、外したら承知しないヨ」

凄みのある台詞に、銀の艦娘は不敵な笑みで返す。

「絶対に外さない。神の盾(イージス)の名は伊達じゃないネ」

イージス？聞き慣れない言葉に眉を顰めたのも一瞬、鼓膜を叩いた複数の爆音に身構える。駆逐艦たちが戦っている音だ。複数ということは苦戦を意味している。

「チクショウ……！」

闇夜に阻まれて狙いがつけられない。頼りにしていた月光も陰ってしまった。戦艦の大砲は一撃必中を狙う兵器ではなく、夾叉砲撃によって徐々に狙いを絞っていくものだ。敵は複数、使える砲塔も残弾も残りわずかなうえ、仲間は危機的状況だ。夾叉砲撃などをしている暇はない。歯噛みする金剛の背後で突如紅蓮の光が沸き起こる。はっと振り返れば、銀の艦娘の角張った艤装が音を立てて展開し、無数の槍が炎をあげて先端の突起を迫り出していた。

「マム！旋回角８５、俯角２度に全弾発射して！そこに大物がいる！小物は私が片付けるネ！」

仰角２度？ほとんど水平だ。そもそも、どうしてこんなに濃い闇の中で狙いをつけられるのか。温度や風力やコリオリの計算には熟練の砲手妖精だって時間がかかるのに、それをした様子もない。当たるはずがない。だが、金剛は信じた。こんな奇妙な艦娘、会ったことなどない。だが、信じるに足る何かを感じた。熱い絆を、確かに感じた。

「「全砲門ッ!!」」

３５．６サンチ砲が唸りを上げて旋回し、砲門が闇に突き付けられる。銀の艦娘の艤

装のＶＬＳハッチが全て開き、獅子の如き咆哮が大気を揺るがす。
「斉射(ファイア)!!」「発射(サルボー)!!」
４５口径６４０キロの砲弾が漆黒の闇をぶち抜き、次々と射出される無数の飛翔体が灼熱する砲弾に付き従う。今まさに雪風に迫ろうとしていた軽巡へ級は、予想だにしない真横からの強烈無比な砲撃を受けて考える間もなく四散した。飛翔体の群れは崩れ落ちる軽巡へ級に衝突する寸前で垂直方向に急上昇(ホップアップ)。空中で花火のように散開すると、駆逐艦たちに毒牙を伸ばすそれぞれの敵に直上から時速８００キロで突っ込んだ。飛翔体は一発も狙いを外すこと無く深海棲艦の土手っ腹に命中し、全ての敵は一瞬の輝きを最後に海の藻屑と消えた。
しばし呆然としていた雪風がハッとして砲弾が発射された方角に目を向ける。遥か遠方、晴れゆく黒煙の隙間に気高い白装束が見えた。間違いない。戦艦金剛だ。自身も大破寸前の身でありながら仲間の窮地を見事救ってみせた古強者の姿に、雪風は背筋が熱く泡立つのを感じた。
「あれ?」
ほんの一瞬、雪風には金剛の背後にもう一人の銀色の艦娘がいたように見えた。だが、次の瞬間には跡形もなく消えたため、見間違えだと判断した。事実、金剛もその艦娘のことは誰にも語らなかった。しかし、それまで嫌っていたはずの珈琲を嗜みだした

のは、その戦いの直後のことである。

イージス艦『こんごう』。

米海軍の技術供与により建造された本艦は、海上自衛隊初の高度戦術情報処理装置（イージスシステム）を備え、対水上戦闘において旧来艦とは一線を画す性能を有している。特に探知性能は極めて高く、例え漆黒の闇夜であろうと敵を見誤ることは決して無い。